

発行
北海道ポーランド文化協会

〒060-0018
札幌市中央区北18条
西15丁目3-19 安藤方
電話・FAX 011-556-8834
hokkaidopolandca@gmail.com

POLE

第97号 2019.5.1
北海道ポーランド文化協会 会誌

北海道ポーランド文化協会
東京事務所
〒107-0052
東京都港区赤坂
9-6-29-309
音響計画(株) 霜田気付
電話 03-6804-1058
FAX 03-6804-6058



日本・ポーランド
国交樹立100周年
記念事業
(1919~2019)

《第90回例会》朗読と交流の会

入場無料

※予約不要、どなたでも参加できます

第9回 「午後のポエジア」

2019 6/1 (土) 14:00 ~ 17:00



北海道大学クラーク会館3F 大集会室2 (札幌市北区北8西8)



テーマ 私のポーランド

第9回目となる「午後のポエジア」。今回は日本・ポーランド国交樹立100年を記念して、日本人とポーランド人の出演者がポーランドへのさまざまな思いを、詩の朗読、音楽、映像、語りなどを通して自由に表現します。改めてポーランドを見つめ直してみませんか。

第一部 ポーランドの絵本の紹介、古今の詩(ノーベル賞詩人ヴィスワヴァ・シンボルスカ[1923-2012]、ノーベル賞候補詩人ズビグニェフ・ヘルベルト[1924-98]、「蒸気機関車」「アルファベット」などの児童詩が今も愛唱される詩人ユリアン・トゥヴィム[1894-1953]、ポーランド・ロマン派三大詩人の一人ユリウシュ・スウォヴァツキ[1809-49]ほか)やポーランドに思いを寄せる自作詩の朗読など

第二部 楽器の演奏や歌をまじえ、ポーランドの雰囲気を楽しみます。飛び入りも歓迎

交流会 スナックや飲み物で自由に交流をお楽しみください。

共催 ポーランド広報文化センター、後援 (公財)札幌国際プラザ



お問い合わせ 電話 090-2695-3880(小林)
mail: hokkaidopolandca@gmail.com



写真(左・中)ワルシャワ(右)クラクフ

《第 87 回例会》札幌エルプラザ 2019.2.20

ポーランド名画ビデオ鑑賞会

『大理石の男』

当会では元会員の故藤平隆さんから寄贈されたポーランド映画傑作選のビデオテープ全 10 巻の鑑賞会を 2016 年 12 月《第 79 回例会》から順次開催して 4 回目となります。今回の上映作品はアンジェイ・ワイダ監督が 1977 年に制作した『大理石の男』、本傑作選中のワイダ作品では最も新しいものです。

新聞にイベント情報が掲載されなかったため、スタッフだけの参加になるのではないかと不安もありましたが、平日の夜にもかかわらず 20 名を超える方々にご参加いただきました。そのうちおよそ 3 分の 2 が会員以外の方だったのは少々意外で、ポーランド映画ファンの裾野の広さを感じました。

2 時間 42 分という長尺の作品ですが、途中退席される方もなくみなさん最後まで熱心に鑑賞されて

いました。

上映終了後、佐藤晃一さんの司会で懇談会に移り、みなさんに感想を語っ



ていただきました。アンケートから紹介しますと、「あのような時代でも強い女性がいたことに強い共感を覚えた」「何度見ても感興深く見た」「連帯運動前夜の映画だと思った。決して暗くなく希望を感じた」「ロック調の音楽が新しい時代を象徴していた」「最後のテレビ局の廊下を二人が颯爽と歩くシーンが新しい時代を予感させて印象に残った」などの感想がありました。

傑作選からのビデオ上映は今回で 7 作目ですが、アンケートには比較的新しい作品の上映を希望する声もあります。今後、可能な範囲で傑作選以外の作品も含めてポーランド映画をみる機会をつくっていきたいと思っています。(園部真幸)

《第 88 回例会》札幌エルプラザ 2019.3.3 講演会
尾形芳秀「樺太時代の忘れ物～ポーランドへの誘い」

子守唄

幼な子よ ねんねしな
まぶたつむって ねんねしな

母はどこにもいきません
ここでおまえと共にいて
遠くはなれた父のこと
祈って 今夜もねんねしな
安らぎの淵深く どこまでもどこまでも
おまえと共にどこまでも
だからお願い 父の名を
決して呼んではなりません
父は国を守るため
この地を離れて行きました
この闇夜に光射す時がやってくるまで
私は見捨てられた敷居の上に待ちます
瀕死の瀬戸際のこの戸口で待ち焦がれ
尚も夜の帳が私を覆う
嗚呼、今宵も望み叶わず
痛む思いは奪い去られる

幼な子よ ねんねしな
まぶたつむって ねんねしな

(ポメイ詩、熊谷敬子訳)

詩:ポメイ Louis Pomey (1835-1901) Berceuse
(1848)

原曲:ショパン Fryderyk Franciszek Chopin
(1810-49) マズルカ第 24 番ハ長調 Op.33-3
編曲:ポーリーヌ・ヴィアルド Pauline Garcia-
Viardot (1821-1910)

講演を聞いて

ポーランドの旅で撮影された写真などをふんだんに用いた尾形さんの貴重な証言に感謝します。



流刑植民地と強制労働、ホロコーストの強制収容所、市街地に残る無数の弾痕など、当時の権威者たちの行為はどれもこれも醜い蛮行ばかりと思えます。

しかし、その只中にあっても「良きサマリア人」のようなホスピタリティーを無償で示すことができた人たちが私たちの島々にも存在したという情報は、同じくこの島で育まれる者として、思い起こすべき偉大な誇りとなりました。チェフサンマ(別称シンキンチヨウ)の物語は私たちの心の宝です。

また、講演の中で、ショパンに縁のある「子守唄」という歌曲を熊谷敬子さんが翻訳しご自身で朗読され、BGMには原曲の A.ルービンシュタインによるピアノ演奏の録音が流されました。ショパン直筆の 17 の歌曲からすると外典にあたる作品ですが、ショパンの良き理解者であった当時の偉大な歌手たちが、彼の死後にマズルカなどの多くのピアノ曲に、

彼の考え方の根幹に敬意を評した上で相応しい歌詞を付けたものの中にも素晴らしい内容の歌曲があり、これらの詩もショパンの「聞こえざる第二のメッセージ」として今日まで多くの歌手によって歌い継がれています。歌詞はフランス語でルイ・ポメイという詩人の詩を引用し、曲はショパンのマズルカからポーリーヌ・ヴィアルドがアレンジしたものです。

このように、当時の混沌の世にあって、今回の対談のように、小さなサロンに集まったアーティストたちが、日頃、決して人目に触れることも、話題にさ

れることもなく、ただ忘れ去られるべき人間の深い悲しみの一面に、しっかりと関心を示していたことを、この曲や、そのほかの詩人たちの残した言葉のアー
トから見て取れることは、私たちにとっても大きな喜びです。なぜなら、弱い立場にある女性や子供たちに見られるこのような境遇は、今日の平和で豊かな時代にも、そこらじゅうの灰の下に沢山埋もれているであろう、克復し得ない悲しみなのですから。

(松山敏) (POLE95 [2018.9] p.10-11も参照)

写真(左から)松山莞太、國井皇太、尾形芳秀

《第 89 回例会》北海道大学学術交流会館 2019.3.16

B・ピウスツキ没後 100 年記念

講演の集い(2)



日本・ポーランド
国交樹立 100 周年
(1919-2019) 記念、
ブロニスワフ・ピウス
ツキ没後 100 年記
念、講演の集い～

ポーランド、サハリン、北海道～の 2 回目である。

講師は井上紘一北海道大学名誉教授で、タイトルは「ブロニスワフ・ピウスツキの生涯と仕事」。没後 100 年と言いつつピウスツキの碑は、第 3 碑が 2017 年にリトアニアに、第 4 碑はポーランドのジョリと、この 30 年に 4 基建てられ、つまり評価は割りと最近になってからのことである。

皇帝暗殺未遂事件に関わり 1887 年基本は死刑であるが、貴族の家系で歎願もあり流刑となった。1896 年に北樺太で減刑となるが移動はできず、その地に留まり土着のギリヤークのフィールドワークなどに従事する。浦塩(ウラヂヴォストク)で 1902 年父が永眠。1902 年に樺太に戻りアイヌ関連の作業に従事、東部アイコタンのバフンケと会い、チュフサンマとアイヌ式の結婚式もあげる。樺太では識字率を高めるように進言をしたりもするが、しかし 1905 年の日露戦争の影響を受け愛妻を置いて欧州へ脱出する。その際に日本へ 7 カ月ほど立ち寄り二葉亭四迷などとの交流があった。欧州に戻るがポーランドは分割され亡国の状態であった。1907 年には幼馴染のマリアと結婚する、しかしマリアには法律上の夫がいたというからややこやしい。1910 年(の日英博覧会だと思いが)平取などからアイヌの方たちが参加し、その聞き取り調査を行ったようだ。1914 年には第一次世界大戦がはじまりウィーンへ。その後ポーランド独立運動に参加するも

1918 年にセーナ川で自死したとされる。

次いで北海道大学大学院の新井藤子氏による「日本で取り組まれてきたブロニスワフ・ピウスツキ研究の系譜」。系譜とは何かということであるが、時間の流れということがある。以前は、チュフサンマは弟の妻として紹介、誤解されていた。弟のユゼフの方がポーランド共和国の建国の父にして初代国家元首として有名だからだ。兄であるブロニスワフの肩書は多く、民族学者、人類学者、言語学者、社会主義活動家、流刑人 etc.で位置付けが不明瞭である。そのなかでブロニスワフといえば蠟管レコードで知られている。その蠟管はポーランドでは古文化財で扱いが難しく、国際プロジェクトとなる。さらに直接触れられないデリケートなもので、再生には音響工学の知識が必要で、レプリカを作成するには歯学の技術も必要、さらに直接針を置かない様にレーザーでの読み込み、雑音を消す技術的サポートもある。結局『ピウスツキ著作集』は 1986 年に刊行を決定するに至る。研究は研究では終わらないものであり、人間にまで戻らないものは意味をなさないだろう。例えば、白老でのアイヌの舞踊もコマーシャル的との批判もありつつ、時代に合わせ変容する自由度がなければ生き残れないものでもあるということだ。(村田譲、空への軌跡・吟遊記 2019/3/24 より)

写真(左から)新井藤子、井上紘一

さっぽろ雪まつり第 46 回国際雪像コンクールに今年もザブジェ市から Team Snow Art Poland(写真左から 芸術家 Piotr Proba、建築家 Marcin Brus、彫刻家

Tomasz Kolega) が参加、作品「お互いを分かり合おう」を製作しました。



大通会場 11 丁目国際広場 2019.2.3 - 7

《特別寄稿》

ポーランドで暮らす択捉島土着のアイヌの末裔

三和 昭子

サシばあさん

大正 5 年生まれの父は択捉島の出身です。父の祖父は三浦という名で青森から択捉島にわたり、土着のアイヌだった祖母と結婚したと聞いていました。何故青森から遙か択捉まで渡ったのかは知りませんが、その祖母はサシという名前で、サシばあさんと呼ばれていたらしく、自分の死期を悟ってからは、衣装箱の一番下に用意していた死に装束を着て伏せ、一滴の水も食べ物も口にできなかったごっつい人だったらしくと何度も聞かされ、私もアイヌのサシばあさんみたいに誇り高く生き死にたいとずっと憧れてきたように思います。アイヌは誇り高く又その自然に対する畏敬や感謝の文化をいつも誇りに思い、自分にその血が流れていることが誇らしくてなりませんでした。

九州から北海道へ

私達家族は、父が八代海の干拓に関わっていて、九州の熊本県八代市に住んでいましたが、小学校四年生のときに転勤で福岡に引っ越しました。福岡女学院中等部に入学した時だったと思います。本籍や両親の身元調査のような書類を書く機会があって、その時に母は満州の大連生まれ、父は択捉島生まれと知りました。本籍は北海道択捉郡留別村(なぜか留萌郡留萌村と覚えていたのですが、調べてみたら択捉島には三つしか村がなくて、留別村が正しいようです)と難しい漢字が並び、こんな読み方もあるんだなと漠然と思ったものです。

ミッションスクールでは毎朝礼拝があり、キリスト教に心を惹かれた私は中学二年生で洗礼を受けました。中学一年生の冬に父が転勤で日高に移り、私たち家族は学校のために福岡に残ったため、いつも遠いところにいる父を恋しがっておりました。しかし三年目の別居生活に疲れた母は札幌ならと北海道に引っ越すことに同意して、私は北星学園に編入しました。札幌でも、教会学校の助手や礼拝でオルガンを弾く練習や、讃美歌の合唱隊、祈祷会、聖書研究会と私は益々教会にのめりこみ、大好きなチョコレートも止めて貧しい人たちのためにと献金をし伝道活動に励んでいました。父も週末には帰宅して私達を温泉や湖や山に連れて行き、冬にはスキーやスケートを教えてくれました。

社交的なことが好きな母は、見知らぬ土地で恐らくは友達が少なくなつて寂しかったのでしょうか、

父の名前が丁稚みたいで本当に嫌だわとか、子供たちにアイヌの血が入っているのが嫌だとかよく母の嘆きを聞くようになりました。父は北海道に来れたのがとても幸せのようなのに、静内を特別好きなようなのに、何と心無いことを言うのか、そもそもアイヌの血のどこがいけないのか、私は徐々にそんな母を責めるようになりました。

母の父は満州で満鉄から大連の港長になり、政治家にもなって中学校を建てたり、戦後も神戸で妻と愛人を一緒の家に暮らせるような人でしたが、子供達の教育を重視して女の子は全員ミッションスクールに通わせ、ピアノを習わせ、男の子は美大と土木建築を修めさせるといった具合で、そのパンカラの叔父が、父の仕事ぶり男ぶりを見込んで、わが妹を是非にというご縁になったのです。

ところで父の家での趣味は尺八と習字で寡黙、蝶よ花よで育った母は全く違う環境で何度も逃げようと思ったようです。それでも後にはコーラス、謡曲、サラサだ料理だと社交を広げ、ヒスを起こしながらも家を守り四人の子を育てて来たのでした。母は典型的な和人でした。アイヌは土人、野蛮人、恥ずかしいから絶対人にそんなこと言わないでね。

でも私はその頃、よく父の幼少の頃からの辛い話を聞くようになりました。5 歳頃、網元の叔父にもらわれていった父は、両親が死んだと言われましたが、何里もある昼でも暗い森の道を逃げ帰る途中で何度も捕まり、ついに両親とは再会しなかったようです。父は小学校もまともに行かせてもらえなかったと言っていました。夏は舟で網の番をし、冬は炭焼きで山に入つたと言います。学校に行けたのは春と秋だけだったと。網元の叔父は酒飲みで、毎晩晩酌をしながら、父を目の前に座らせ、酒という字を百回も書かせられたとも。でもそのお蔭で字が上達して身を助けたから不思議なものだと。

今思うと

覚えているのは、父が長い真っ白な髭の写真を仏壇に飾って拝んでいたことです。あれが父親だったとすると、次男だった父は恐らく養子に出されたのでしょう。母親の写真は見たことがありませんし、父の口から母親のことは聞いたこともありません。今思うと何故だろう? と思いますがもう聞く人もいません。

今ふと思ったことですが、アイヌのサシばあさんはもしかしたら、父の祖母ではなく母親だったので

はないだろうか？ と。もし父の祖父が択捉に渡ったとすれば、まだ明治になってはいないはずです。三浦という姓が百姓に許されていたとは思えない…武士だったとも聞いていない…母親が亡くなったので父は養子に出されたのかもしれませんが。それに祖父のあのやたらに長い髭の伸ばしかたはアイヌの風習そのもの。加えて私たちがウメ叔母さんと呼んでいた人の顔は口の周りに刺青が無いだけでアイヌの顔そのものでした。父の彫りの深い顔と奥まった灰色の眼とは少し違うけれど目は奥深く真っ黒で眉がひどく濃かった…私のマユも若い頃はゲジゲジといわれた位ですし、妹は毛深くて一緒に寝るとチクチクして痛い位。それにウメ叔母さんの指先は四角くて平たくて不思議なソリをしていました。父も私も。

父の思い

私たち姉妹は、四人ともあまり勉強の出来が良くなかったので、本当に贅沢にも全員が私立に通わせてもらい大変だったでしょう。父は本当に学校に行きたかった、だからお前たちにはどんなことしても好きなだけ学ばせてやりたいと何度も言っていました。私たちが学校に行かせてもらえたのは、そうした父の果しえなかった学びへの飢えと憧れと、そして母の「学校はミッションスクールじゃないとね」という思い込みが一致したからでした。

父は北海道のことを本土と呼んでいました。戦争ではじめて本土に渡ったと。鮭が川に盛り上がりて来るのを手で掴み取る話。岩陰の鱒を尾びれの方からそうっと撫でる様にして掴み上げて見せてくれた父。私は小さい時から樹木や花と話ができるのよ、とよく言っていました。今でもエコに拘り土に触れるとエネルギーをもらえるのはアイヌの血だと益々思えるこの頃です。たくさんの父から聞いたかったことは、私もあちらに行ってから聞くことにしましょう。

(みわ・あきこ、ポーランド・ハルクローヴァ村)



木村和保氏講演会@ザコパネ・タトラ博物館 2018.10.22
(左から) 三和昭子、アンナ・ヴェンデ=スルミャク館長、井上絢一のみなさん (POLE96 [2019.1] p.5 参照)

<http://24tp.pl/n/51946>

Moja historia 私のヒストリー

ポーランドに来たのは 1989 年。ある冬の散歩でゴルツェ山脈にあるこの場所に出会った。ハルクローヴァ村の上に横たわる美しい山の斜面。雪に覆われたタトラ山脈とその裾野、ドナイエツ川などの雄大な眺めは、高校時代を過ごした北海道を彷彿させた。日本ではすべてが満たされていたのに満足感がなかった。当時 55 歳で女性は定年、虚しさが残る。

この場所に魅惑された私はこの美しい斜面を買い、ここにペンションを建てることにした。道は長い間、木を切り出して引きずって来たため、一メートル半ほどの深さになった林道で、粘土質の泥の道はトラクターでも 4 輪駆動の車でも通れなくなり、道に石を入れるしかなかった。砂、砂利、石、セメント、レンガ、木などすべて上まで運ばなければならない。1991 年に始めた建築も 2 年半で何とか仕上がった(道の問題は長く残る)。美しい眺めとともに 12 部屋 24 人収容できる山小屋風木造のヴィラが、暖炉のサロンやビオ浄化槽を備えて完成した。

ヴィラを建てる間にずいぶん健康も崩し、精神的にも苦しかったが、代わりに二倍の生きる力と親友たちを得た。建築中に日本から子供たちが順次来て、大変な時期を一緒に生き延びた。後に友人たちとポーランド・日本交流、環境を蘇生するための「虹の会」を立ち上げ、様々な文化交流やエコロジーの教育を通して自分たちの周囲の環境を良くしようと試みた。桜まつり、凧揚げ大会やコンサートなども日本との文化交流の一環だった。

この住所は「有明」。村会議、郡会議、県会議を通して承認され、公式住所となった。有明は夜明けが近づいているけれど、まだ月が明るく空にかかっているその特別な時の状態をいうのですが、私が生まれ育ったのは九州の有明海に面した八代、最後に住んでいた場所も長野穂高の聖山有明山の麓、有明。有明には縁がある。

日本では人生がここより早く過ぎる気がした。人々はどこでも押し合いをしている気がする。何かに間に合わなければいけないし、遅れてはいけないから。今はポーランドのテンポの方が好き。遅れてもいいから。でも野の花が咲くのは見逃さないし、とうひの森のざわめきも鳥たちが歌っているのも聞き逃さない、雲の流れも。どこへ行こうと、私は私の村ハルクローヴァに喜んで帰ってくる。休暇や祝日などは子供たちが孫たちとやってくる(9 人の孫のうち、6 人はポーランド、3 人は日本)。「ついに私はここ、自分の家にいる。」って感じ。

© Akiko Miwa 2019

<http://www.akiko.pl/o-mnie/?lang=ja>



《新会員のひと言》

歴史と音楽の

魅惑に

渡辺 宗子

私のポーランドは、民族音楽とその楽器そして、ドイツとロシアに挟まれ併合の憂き目や破壊の痛手を受けた歴史などを遠くに感じていただけでしたが、その国の独立回復百周年記念に因んだ慶賀にお声がけを戴き、魅惑的な催しに感動し参加させていただきました。

常に警戒を必要とした国の団結の堅さや指導的役割を果たした芸術・音楽・科学者たちが国民の受難を支え悲運を梃子に民族心を高揚させ、二十世紀初頭、祖国の独立と自由を獲得、めでたく世界の慶瑞となったのです。私はこの会場で、ポーランドに飛び込みました。そして「ブロニスワフ・ピウスツキ」の講演・映画・朗読に没頭しました。

人類学者ピウスツキの生涯に樺太・北海道アイヌの方々等々、ごく身近な生活圏内で展(ひろ)げられるまだ生々しいロマンの悲歌に感応したのはいうまでもありません。

ずっと以前、白老ポロト湖畔にあったアイヌ民族博物館に幾度も訪れながら、ピウスツキの像を知らず、平取の二風谷でも突然現われたアイヌ風俗巨像の色彩豊かな宮殿かとまがう建造物に仰天したことなど、一連の繋がりが持てました。

二次会にも参加させていただき、ポーランドの方や協会の方々の親しみ溢れる温かな抱擁に深い感慨を覚え、ショパンの楽奏と共に朧に映画(「灰とダイヤモンド」「地下水道」)の記憶をまさぐってりました。(わたなべ・そうこ)

アウシュビッツ

への旅

土橋 芳美



北星学園大学が一九九五年に企画した「平和の旅」で姉と共に初めてポーランドを訪れた。

この旅で考えさせられたことは多くあったが、特に「戦争」と向きあうことになった人間の在り様についてだ。

アウシュビッツ強制収容所を訪れたときの、大地から立ち上がる呻きにも似た空気におののいた。

ガス室に入れられる前に切られたという女性の髪の毛の山、三つ編みにされた幼女の髪の毛の先に結ばれていたピンクのリボン。

大型の旅行カバンの山々、いずれ戻ると信じて書かれたであろう、くわしい住所と名前。

人間の住まいとは思えない三段になった寝床など、そこからあがる悲鳴が聞こえるような気がした。

外に出ると、空は晴れ、空気は澄んで美しく、野の花が咲き風に揺れていた。

帰国してすぐに、画家である姉は百三十号もの大作「アウシュビッツ」を描いた。

私は今も言葉を紡げずにいる。

どんな試練のなかからでも、何度でも立ち上がり、それでも人間は素晴らしいと詩(うた)ってくれた、ポーランド市民に学びたい。(どばし・よしみ)

ポーランド語との

格闘始める

村田 雄穂



新入会員の村田です。帯広市在住で、イタリア語の通訳及び翻訳を行いつつ、「帯広イタリア言語文化教室」を開設し、イタリア語などのレッスンもしています。つまり、専門はイタリア語です。

そんな私が「ポーランド」に関心を持ち始めた、そのきっかけは『PRESTO CON FUOCO』(ロベルト・コトロネオ著)というイタリア語の小説を読んだからです。この邦訳もあり『ショパン 炎のバラード』という邦題で集英社(2010)から出版されています。

内容は、ショパンの「バラード第四番作品 52」には、実は未発表のフィナーレ部分があったのだ、という設定で、その未発表楽譜の手稿をめぐる音楽歴史ミステリー仕立ての小説です。

それを読む過程で私に関心を抱いたのは、ポーランドの「バラード」という文学形式です。ショパンのピアノ曲バラード四部作は、アダム・ミツキューヴィチらの文学作品「バラード」から着想を得たという伝説が存在するようですね。その正否はともかく、私は、まずミツキューヴィチの「バラード」の日本語訳を読んでみましたが、これはなかなか興味深い内容でした。でも、基本的にこれは「詩」ですから、ポーランド語の音の響き無しではやはり物足りない。

それで、1年ほど前からポーランド語を学び始めました。帯広にはポーランド語を学べる講座はありませんから、市販のテキストを使い細々と独学をしています。(むらた・ゆうほ)

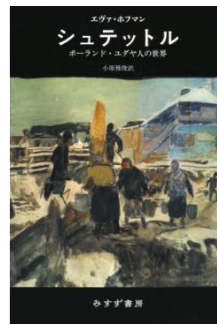
《新刊紹介》

エヴァ・ホフマン著『シュテットル ～ポーランド・ユダヤ人の世界』

小原雅俊訳、みすず書房、2019.3

「ポーランドの風景に一面にちりばめられた〈…〉数多くの〈…〉シュテットル、これらの村や町におけるほど、(第二次世界大戦中の)破壊が徹底的であったところはほかにない。これらの村は今もなお存在している。それらの多くは今なお美しく、強い地理的な望郷の念ももっともと思われるほどだ。〈…〉いくつかのシナゴグはまだ立っている。そのうちのいくつかは放置され、見捨てられて今にも崩れそうになっており、あるものは保存され、修復を施されて過去の威厳を取り戻している。村境の外には、雑草と野生の灌木が傾いた墓石の上に一面につるを伸ばした、小さなユダヤ人墓地を見つけることができる。ユダヤ人がナチスによって駆り集められ、射殺された雑木林をポーランド人農夫が私に教えてくれる。〈…〉これら、あちこちにある不可思議な遺物は、何らかの消滅した古い文明を想起させる。しかし、かつてここに存在した、生命が脈動したユダヤ人の世界はもはやない。小さな商店や屋台、ひしめきあう人々、荷馬車や馬、イディッシュ語やヘブライ語で発せられる響きはもはやない」

「ホロコースト後の記憶の中で、ポーランドは特別な位置を占めている。ほかならぬここに、戦前、世界で暮らすユダヤ人の大多数が住んでいたのであり、ほかでもないここで、ヨーロッパのユダヤ人の絶滅が起こったからだ。〈…〉ほかならぬポーラン



ドに、絶滅の標的にされた人々の大多数が暮らしていたからである」(「序文」から)

『シュテットル』は、真の多民族・多文化国家であったポーランドで、ユダヤ人がポーランド人の中で、ポーランド人とともに暮らしてきた六百年の歴史を背景に、

ポグロムの、次いでホロコーストの残虐に見舞われて歴史の闇に没してしまっただポーランドの東部国境地帯にあった「シュテットル=小さな町」ブランスクの壮烈な歴史から見えてくるポーランド人とユダヤ人の長い共存と分離の実験についての、稀代の語り部エヴァ・ホフマンの、ことのほか興味深い本だ。

本書にはポーランド・ユダヤ人の歴史のすべてがあると言ってよい。ユダヤ人の歴史のみならず、ポーランドの過去と現在、未来を理解するためにも、ぜひとも読んでいただきたい本である。

(小原雅俊、東京外国語大学名誉教授)

♪NPO 法人まするか北海道第8回東日本大震災被災者支援コンサート「私たちは忘れない!」(ピアノ: 遠藤郁子)で、日本ポーランド国交樹立100周年に因み、在札幌ポーランド人のみなさんがポーランド国歌を合唱しました。



光塩学園天秘ホール 2019.3.9



ポーランド&ニッポン歳時記 29



巣作り

最近、我が家の窓の向かいの梢に二羽のカササギが飛んできて、巣を作り始めました。仲間たちの後を追って飛び回ることなく、せっせと小枝を運んできては、丁寧に積み重ねたり、整えたりしています。毎朝、彼らの作業を眺めるのが楽しみです。

białe niebo

青空や

dwie sroki wiją gniazdo

カササギが巣を

na naszym drzewie

新築す

Monika Tsuda, Poznań ポズナン市、津田モニカ

jasny poranek

朝夢の

granicę snu przekracza

境越えくる

klangor żurawi

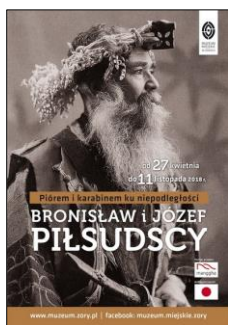
鶴の声

Piotr Wrzeciono, Warszawa ワルシャワ市、ピョートル・ヴジェチョノ

黎明の四時打つ時計余寒かな
新元号蛇穴を出づ日本かな
伊右衛門の茶を飲み春の句を作る

岩見沢市、霜田千代磨

アイヌ古老の画像 ジョリ市立博物館のブロニスワフ・ピウスツキ没後ポーランド独立回復 100 周年記念行事(特別展「アイヌの世界～ブロニスワフ・ピウスツキから萱野茂まで」2018.5-11 ほか)のポスター等に使われたアイヌ古老の写真の出所が話題になり、平取



町立二風谷アイヌ文化博物館の長田佳宏さんの調査で木下清蔵氏(1901-88)撮影の貝澤藤蔵翁(1888-1966)の写真(『近代白老アイヌの歩み～シラオイコタン～木下清蔵遺作写真集』白老・財アイヌ民族博物館刊、1988、p.10)とわかりました。

貝澤藤蔵はカリワウクの子として二風谷で生まれたアイヌ民族の社会活動家で、小冊子『アイヌの叫び』の著者、妻コヨは旭川、近文アイヌの長・川村カ子トと才登の妹。1930年代には「毎年冬になると本州各地を巡って」アイヌをテーマに講演を行った。1951年、川村カ子トが再建したアイヌ記念館で解説の仕事をはじめ、同年に設立された白老観光協会の役員に就任、晩年は白老でアイヌ民族の紹介に努めた(ja.wikipedia)。

木下清蔵は現在の青森市油川生まれの写真家。大正から昭和にかけて北海道のアイヌ民族の写真を数多く撮影した。(安藤厚)



2019年6月のイベント

《第90回例会》朗読と交流の会 第9回午後のポエジア「私のポーランド」、日時:2019年6月1日(土)14:00～17:00、会場:北海道大学クラーク会館3F大集会室2、入場無料

入会(ご芳名、敬称略、2019.1～4)

入会:村田譲

ご寄付(維持会費)ありがとうございます(敬称略)

(2019.1～4、1口千円)(10)土橋芳美(7)霜田英麿(3)霜田千代麿(2)三上和子、石田レイ子(1)中島洋、杉山淳

本年度(2018.9～2019.8)会費納入のお願い

年会費(一般3,000円、学生1,500円)と、維持会費(任意のご寄付1口千円)の納入をお願いします。

【郵便振替口座】記号027405番号19735

【加入者名】北海道ポーランド文化協会

[北洋銀行(本店営業部)普通預金口座]

[店番号]028[口座番号]0605084

[名義]ホッカイドウポーランドブンカキョウカイ
北海道ポーランド文化協会 会長 安藤厚

※ご請求額については、個別の納入お願い文書と郵便振替用紙をお送りします。

目次

《第90回例会》朗読と交流の会 第9回「午後のポエジア」	1
《第87回例会》ポーランド名画ビデオ鑑賞会『大理石の男』(園部真幸)	2
《第88回例会》講演会尾形芳秀「樺太時代の忘れ物～ポーランドへの誘い」 子守唄(熊谷敬子訳)講演を聞いて(松山敏)	2
《第89回例会》B・ピウスツキ没後100年記念講演の集い(2)(村田譲)	3
さっぽろ雪まつり第46回国際雪像コンクーにTeam Snow Art Polandが参加	3
ポーランドで暮らす択捉島土着のアイヌの末裔、Moja historia 私のヒストリー(三和昭子)	4
《新会員のひと言》(渡辺宗子、土橋芳美、村田雄穂)	6
《新刊紹介》エヴァ・ホフマン著『シュテットル～ポーランド・ユダヤ人の世界』(小原雅俊)	7
NPO法人まざるか北海道第8回東日本大震災被災者支援コンサートでポーランド国歌を合唱	7
ポーランド&ニッポン歳時記29(津田モニカ、ピョートル・ヴジェチョノ、霜田千代麿)	7
アイヌ古老の画像(安藤厚)	8
《ズビグニェフ・ヘルベルト詩集より》(栗原成郎訳)	別冊1
流れゆく、北辺の花(嵩文彦)	別冊2

POLE

第97号 ポーレ編集委員会

氏間多伊子／熊谷敬子／塚本智宏／松山敏／ラファウ・ジェプカ

《ズビグニェフ・ヘルベルト詩集より》乗原成郎訳

想像力という小箱

Pudełko zwane wyobraźnią

指で壁をたたいてみてごらん—
櫛の切株から
とび出してくるよ
お人形さんが

樹を呼び出すよ
一本また一本と
ついに出来るよ
森が

口笛を吹いてごらん 静かにね
おや流れ出したよ 小川が
強い糸だよ
山と谷をつなぐ糸だよ

咳払いをしてごらん 意味ありげに—
ほら 都市(まち)が出来たよ
一基の望楼が立ち
狭間(はざま)を設けた城壁があり
黄金(こがね)色の家並みがある
遊び道具の
骰子(さいころ)を投げたようだね

今度は
目を閉じてごらん
雪が降ってきて
消してしまうよ
樹々の緑の炎を
赤い望楼を

雪の下には
夜がある
その頂には煌(きらめ)く大時計があり
風景画の梟(ふくろう)が止まっている

木製の小鳥 Ptak z drzewa

子どもたちの
熱い手の中で
木製の小鳥は
生きはじめ

ラッカー塗りの羽根の下で
小さな心臓が溢れ出た

ガラスの目が
眼差しとなって燃え上がった

色塗りの翼が
動き出した

乾いた体が
森へ行きたがった

行進していった
バラードの兵士のように
脚の撥(ばち)で太鼓をたたいて
右の脚でたたくと—森
左の脚でたたくと—森
夢に見た
緑色の光と
閉じた目の瞼(まぶた)の
底に罅(ねぐら)を

森のはずれで
啄木鳥(きつつき)たちが彼の目をつつき出した
がさつな嘴(くちばし)の拷問のために
小さな心臓は黒ずんだ
それでも先へ進んでいった
毒きのこにぶつかり
高麗(こうらい)鶯(うぐいす)たちに嘲笑(あざわら)われて
死んだ落ち葉の下に
罅(ねぐら)を探した

今や生きている
有り得ない境界に
蘇生した物質と
考案された物質との間に
森の羊歯(しだ)と
ラルース辞典の羊歯との間に
一本の枯れた茎の上に
一本の脚の上に
風の髪の上に
現実からちぎれ落ちた物の上に
心臓が十分に無い
力が十分に無い物の上に

画像に
生まれ変わることはない

(Zbigniew Herbert “Studium przedmiotu”
『事物研究』より)

流れゆく

嵩文彦

わたしはいま、ちいさな公園のような空き地のまえに立っているのです。正面の山並みの尾根だけにふとく雪がつもり、目に痛くさざりまします。てまえには金魚玉が二つさげられています。なかにいる金魚は花びらになってひらひらとちり、わたしはこの真夏の光線が、湯のなかに金魚をおいてきぼりにする心配にあるのです。ここではなにか祝いごとがおこなわれているようなのですが、わたしにはなにもみえません。香料のただよいもないし、イヤリングのかたほうが土のうえでここですよと、かがやいてもいないのです。ひとは真空のフラスコのなかのように、空気のさわさわはすこしも音しておりません。わたしは木橋のうえにたっています。しらないあいだに川をみているのです。季節はすでに秋も深まっています、わたしのあしもとを、みどりあざやかな大根の葉がときおりさつきつてゆきます。大根の葉には流れに競うきもちがあるよ

うで、わたしには流れよりいつそう早く、わたしの視界から消え去ろうとしているようなのです。大根の葉はほんのたまにしか、わたしを視力のひとにさせません。

川上には割烹着のひとはおらず、姉さんかぶりもみえません。白い大根もつまれてありません。わたしは、とうにいないのはの、とても若いのはの、ポンプの水で、手を真赤にさせているのが見えていて、大根は縄でしばられて軒したにさらされてしなっとなっていて、沢庵漬は冬にたべるのよ、いつまで家で沢庵を漬けていたのかしらね、樽も漬物石ももうどここの家にもみえないし。目を空にむけると、空には川音がさらさらと光っていて、わたしは川のながれになって、大根の葉になって、それを橋の上にいる見るひとなって、もう季節のつながりのひとはなく、家とつながるひとはなく、ただだ、もうだまって、遠くのしまなみにそって舟を漕いでいる、だれともなにも話さずに、ただ舟を漕いでいて、しまなみにそって漕いでいて、着いたところの舟にはもうだれもいなくなっている、とてもさびしい舟なのです。

北辺の花

嵩文彦

島々を／氷塊・アレクサンドラ！ピール
噛み

海抜を蛇腹べた這ふ、むく犬と

術式と術帽／砂丘の褐皮剥ぐ

血滴の渦巻く時計の軸に立つ

蒼穹の明度をすする葱の束

古地図の海／澄明に翼、潜るらん

風花を蹴とばす胴長・毛脛・汗

裂断に（仮）末代のカーペット

忍びきてパン粉に絡げる、夜の始め

鍵穴にパティシエールと向日葵が

ペポカボチャ動乱の雲孕々と

人体の塩類分布図火に捲れ

月光を真水の軍団並足で

皂莢の種・蟻をどる／落暉の掌

コラージュの駅舎の趾間を発つ貨客